130th Anniversary

まちのエコロジーステーション
油藤商事株式会社

まちのエコロジーステーション
油藤商事株式会社

油藤商事株式会社 130周年記念誌

街、人を支える油屋として
繋ぎ、紡いできた130年

明治28年、初代・青山藤八が創業した油藤商店。そこから１３０年。人々の暮らしに欠かせない「油」を生業としてきました。二代目の青山藤一、三代目の青山金吾、そして現在代表を務める四代目の青山裕史。家族で守り続けてきた「油屋」の商売は、過去に学びながら、いつの時代においても、その時代が求める形で、さまざまな新事業やサービスを生み出してきました。

戦争を経て、昭和の経済成長期やオイルショック、そして平成、令和へ。油藤の１３０年と未来をここに記し、次代へ繋ぎます。

CONTENT

街、人を支える油屋として
繋ぎ、紡いできた１３０年 …… 2
祝　辞 …… 4
カンテラ油から始まった油藤商事
１３０年紡いできた油屋としての矜持 …… 12
激動の昭和を逞しく突き進む
時代の波を捉え、事業は大成功 …… 14
昭和30年代以降の快進撃
油藤の事業はめざましい勢いで拡大 …… 16
青山金吾が三代目代表に
エネルギー事業で売り上げを拡大 …… 18
父から息子へ
四代目の新しい挑戦が始まる …… 20
時代は新世代へ
油屋として社会のために
～強みを生かした社会貢献～ …… 22
災害支援の軌跡
～油屋としてできることを～ …… 24
ＧＳの仕事は環境に悪い―
真剣に考える時が来た …… 26
油藤の中心にある忘れてはならないこと
尊い命に守られ、生かされている …… 28
祝　辞 …… 30
事業案内 …… 32
沿　革 …… 34

祝辞

滋賀県知事　三日月　大造

油藤商事株式会社様がこの度、創業130年という節目の年を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。

貴社は、明治28年（1895年）に初代青山藤八様が15歳の時にてんびん棒でカンテラ油（灯油）の行商をはじめられたことを端緒とし、以来130年にわたり、ガソリンスタンドや燃料配達の事業により、エネルギーの安定供給に努めてこられました。雇用創出、地域のコミュニティ形成などの観点からも、本県の経済および地域社会の活性化に大きく寄与されてきたことに対し、深く敬意を表します。

貴社は、これまでの歩みの中で、日々変容する社会のニーズにも柔軟に対応され、ガソリンスタンドの枠を超えて様々な取組にも挑戦されています。現在は、「ガソリンスタンドはまちのエコロジーステーション」をテーマに掲げられ、特にバイオディーゼル燃料の製造販売事業では、回収した廃食油を精製し、地域の物流トラックや送迎バスなどの燃料として使用することで、地域の資源循環のサイクルを生み出されています。

また、自社のみならず、新たにバイオディーゼル事業に取り組まれる事業者に対して、燃料精製、改正品確法、特定加工業や販売に関するノウハウの提供など、その普及にも御尽力をされており、さらに、地域での資源循環システムについての視察・見学の受け入れを実施されるなど、地域循環社会の実現に向けた人材育成にも積極的に取り組んでいただいていることに、深く感謝申し上げます。

本県でもCO2ネットゼロ社会の実現に向けて、県内の様々な企業の皆様の御賛同、御協力をいただきながら、再生可能エネルギーの導入促進や、省エネ・創エネに関する取組を進めております。貴社のような地域内での資源循環の取組がさらに広がることを期待しています。

また、貴社は、BCP支援事業としても、取引先企業の災害や緊急事態時に、燃料油の配送を行う協定を締結する事業も展開されています。自然災害が頻発化、激甚化する中でBCP支援事業は、県内企業が緊急時に事業継続を確保し、経済的損失を最小限に抑えることに加え、従業員の安全確保にもつながる点で非常に意義のある取組であると考えております。昨年の能登半島地震の際には、燃料の給油支援活動や炊き出し支援、家屋倒壊支援ボランティアなど、災害時の復興支援活動にも率先して行動される姿勢に深く敬意を表する次第です。

さて、本県では、産業振興施策を総合的に推進するための中長期の指針である滋賀県産業振興ビジョン2030において、「新たなチャレンジ」が日本で一番行いやすい県、「社会的課題」をビジネスで解決し続ける県を目指し、イノベーション創出や投資の拡大、海外展開など、県内事業者の皆様の様々な「挑戦」を後押ししてまいります。貴社の存在は私たちの日常生活や社会経済活動にとって、欠かすことのできないものであり、重要な役割を果たしていただいています。今後とも県政や地域社会の発展に御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、常に未来を見据え、さらなる地域貢献を目指される貴社のこれからの挑戦に期待しております。

結びに、油藤商事株式会社の今後ますますの御発展と、社員の皆様の御健康と御多幸を心よりお祈り申し上げます。

祝辞

ENEOS株式会社　代表取締役社長　山口　敦治

このたびは創業130周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。

まずは、油藤商事様が今日に至るまで滋賀県における地域エネルギーの安定供給を担ってこられましたことに心より敬服いたします。

また、長年に亘り会社の発展を支えてこられた歴代の社長・社員の皆様のご尽力に対し、深く敬意を表します。

油藤商事様とENEOSブランドとのお付き合いは、昭和30年に株式会社村田石油（現：ENEOSフロンティア）と取引を開始したことに端を発し、以来70年に亘りお取引をいただいております。あらためてそのご厚誼に対し深く御礼を申し上げます。

さらにさかのぼること明治28年、油藤商事様の成り立ちは、初代青山藤八氏が屋号を油藤商店として天秤棒にカンテラ油（灯油）の行商したことから始まったと伺っております。

昭和43年には、油藤商店を法人化し油藤商事株式会社を設立。初代代表取締役となった青山藤一氏はそれまで展開されてきた灯油・LPガスの販売やガソリンスタンドの運営に加え、石油事業の買収や灯油備蓄基地の建設など、自動車の普及を予見された事業展開を進められています。このように幾世代に亘り事業を継続されてこられましたのは、油藤商事様が時代の変化を機敏に捉え、常に挑戦を重ねられてきたことによるものです。

そして現在では、創業当初から受け継がれた石油事業にとどまらず、環境問題を新たなビジネスチャンスととらえ、地域循環型社会に貢献する、「ガソリンスタンドはまちのエコロジーステーション」をテーマに新たな取り組みに挑戦されております。その中心となってご活躍されているのが、2019年に4代目代表取締役社長に就任された、青山裕史氏です。

青山社長は、1994年4月に三菱石油株式会社（現：ENEOS株式会社）に入社、私と同期入社となります。当時、富士山のふもとにあった研修所で新入社員研修をうけ、寝食をともにすごした思い出を今も覚えています。

油藤商事様への入社後は、環境貢献型事業の中心となってご活躍される他、BCP支援にも注力されています。これは、2011年の東日本大震災での燃料油供給やボランティア活動を経験されたことが契機になったと伺いました。加えて、地域の様々な環境部会への積極的な活動や、小学校から大学までの各年代での講演を通じて、油藤商事様のSDGs宣言にある「社会課題解決に貢献する企業」を先頭に立って推進されております。

この輝かしいご成長は戦前・戦後における幾多の試練を乗り越えてこられたご創業者・歴代の社員の方々はもとより、青山社長の優れた識見と指導力、ならびに社員の皆様方のご努力によるものと深く敬意を表する次第です。

「まちのエコロジーステーション」という言葉は、油藤商事様の歴史と、青山社長と社員の皆様が地域密着で一丸となって取り組まれているお姿をまさに体現されております。

現在、私たち石油業界を取り巻く環境は非常に厳しく、挑戦と変革が求められる時代にありますが、この先も社員の皆様一丸となって新しい道を開拓し、チャレンジ精神の溢れる企業として一層ご発展されるものと確信しております。

最後に、油藤商事様の更なる飛躍と関係者様のご健勝とご多幸を心より祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

創業130周年を心よりお祝い申し上げます

衆議院議員　**上野　賢一郎**

明治28年の創業以来、地域経済の発展に貢献してこられた油藤商事株式会社が、この度 記念すべき創業130周年を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。

明治28年といえば日清戦争が終結し、その後の鉄道、造船、化学などの企業が続々と成長し始める年であります。そのような時代背景のなかで、人々の生活に欠かせなくなっていたカンテラ油（灯油）の行商を初代 青山藤八氏が屋号を油藤商店として始められたことが起源と伺っております。

それ以降、昭和時代には本格的なモータリゼーションにあわせて、自動車燃料であるガソリンをはじめとする石油製品を取り扱うなど、経済の成長にあわせて油・燃料の販売へと事業を拡大してこられました。

現在では単なるガソリンスタンドの枠を超え、新しい地域循環型社会への取り組みを始めておられます。各家庭から出される資源ごみの分別回収ボックスの設置をはじめ、一般家庭から出される廃食油からバイオディーゼル燃料を精製する事業には特に力を入れて取り組んでおられます。精製されたバイオディーゼル燃料は建設重機や物流トラック、送迎バスなどの燃料として効果的に使われております。これは、SDGsが叫ばれる昨今において、資源のリサイクル・リユースや、クリーンエネルギーの活用など、環境に配慮したサービスとして大変大きな貢献がなされていると考えております。

明治、大正、昭和、平成、そして令和の時代へと変化にあわせた社会的ニーズを常に見越しながら発展し、幾多の困難を乗り越え地域のお客様からの信頼を深めてこられた青山社長をはじめ、従業員の皆さまへ深く敬意を表します。

結びに、今日の発展を築いてこられた先代の方々の弛まぬご努力を継承しつつ、情熱をもって未来に挑戦し、次の150周年、更には200周年と、今後ますますのご躍進、ご発展を心よりご祈念申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

油藤商事株式会社 創業130周年記念に寄せて

彦根商工会議所 会頭　**沼尾　護**

謹んで、油藤商事株式会社の創業130周年をお祝い申し上げます。

貴社は明治28年、初代青山藤八氏が15歳の若さで、天秤棒を担ぎカンテラ油の行商を始められたことを創業の礎とされました。その後、時代の変遷に適応しながら成長を遂げ、二代目青山藤一氏の代には家庭用石油コンロの燃料である灯油の販売に参入され、昭和43年には法人化を果たされました。

さらに、昭和55年には三代目青山金吾氏が代表取締役に就任され、時代の要請に応じた革新的な取り組みを推進。平成14年には全国に先駆けて軽油代替燃料であるバイオディーゼルの一般販売を開始されるなど、環境とエネルギーの未来を見据えた革新的な経営を展開されてこられました。これらの歩みは、まさに地域社会への貢献と持続可能な発展への強い意志の表れであり、多くの賞を受賞されてきたこともその証であります。

数々の賞を受けられており、平成10年には通商産業省資源エネルギー庁長官賞を受賞、平成13年にはグリーン購入ネットワークグリーン購入大賞中小事業者部門大賞を受賞、平成18年には社団法人日本青年会議所第20回人間力大賞経済産業大臣賞を受賞されました。さらに、平成28年には青山金吾会長が旭日双光章を授与され、また同年に青山裕史社長が東久邇宮文化褒賞を受賞されるなど、その功績は高く評価されておられます。

130年という長い歴史を振り返ると、貴社が常に社会のニーズを先取りし、新たな価値を生み出すことで成長を続けてこられたことがよく分かります。これまでの発展は、ひとえに創始者からの青山氏の皆様の卓越した経営手腕と、従業員の皆様のたゆまぬ努力の賜物でありましょう。

今後も、貴社がさらなる飛躍を遂げられ、次の世代へと誇れる企業として発展されることを心より祈念いたします。持続可能な社会の実現に向け、環境に配慮した取り組みを推進されることを期待しております。

改めまして、創業130周年の佳節を迎えられたことをお祝い申し上げるとともに、貴社のますますのご繁栄を心よりお祈り申し上げます。

創業130年をお祝いして

滋賀銀行
代表取締役 頭取　**久保田　真也**

この度、油藤商事株式会社様が創業130年を迎えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。

貴社は、初代の青山藤八氏が、天秤棒にてカンテラ油（灯油）の行商を始めることで創業されました。天秤棒は近江商人の勤勉さを表す象徴であり、また、灯油は当時、日本の開国とともに西洋から輸入されたランプ用として需要が高まっていました。「三方よし」を重んじた近江商人の精神と、時代の変化を見据えた進取の気性をあわせ持たれていたことが、事業の原点になっていると思います。

そして、現在に至るまで、経済発展の原動力であり、社会の営みを支える「燃料」のビジネスに携わってこられました。自動車時代の幕開けには本格的にガソリンの販売を始められ、地球の持続可能性への懸念が高まる以前から、全国に先駆けてバイオディーゼル燃料の販売に乗り出されました。さらに、回収した廃食油からバイオディーゼル燃料を精製するプラントを建設され、エネルギーの地産地消の仕組みを確立。資源ごみの分別回収を行うガソリンスタンドを、「まちのエコロジーステーション」と位置付け、先進的に環境経営の実践と地域循環型社会の実現に貢献されています。

また、遠方の被災地支援や地元の人材育成にも尽力される企業姿勢は、物流の要衝であり、災害が少ない滋賀県に所在する利を生かし、自社の発展だけでなく、「誰一人取り残さない」というSDGsの「包摂性」をも体現されています。社会全体の幸せをつくりだそうとする強い意思と、化石燃料の将来性から今、何をすべきかを敏感に読む事業センス、イノベーションを起こし先駆的に踏み込む勇気に彩られた貴社の歴史が、先達の方々と共に、会長の青山金吾様、代表取締役の青山裕史様をはじめ役職員の皆様の叡智とたゆまぬ努力によって築かれたことに深く敬意を表します。

これからも、地域になくてはならない企業として、創業130年を契機に更なるご発展を遂げられますこと、並びに関係の皆様のますますのご活躍とご健勝を心から祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

油藤商事株式会社 ご創業130周年のお祝い

株式会社ルネッサンス・ユニバーシティ
代表取締役　**小田　全宏**

この世の中には、日々無数の企業が生まれ消えていっています。かつて日経が調査したところ、創業して100年続く企業は、創業した企業の全体の3パーセントにすぎないという結果が出ています。それほど、企業が存続し続けることは困難なことなのでしょう。その意味で、この度油藤商事㈱様が130周年を迎えられたということは、まことに慶賀すべきことだと思います。しかもこの間、油というまさに私たちの生活の大動脈を担うお仕事をなさりながら、地域や国の環境に対しても確固とした取り組みをされ、数々の国家的な賞を得ておられるということは、まさに企業の志の高さを示していると思います。

私は、現社長の青山裕史さんとは30年来の友人でもありますが、常に前向きに様々な取り組みをされ、地域の発展に尽くしておられる姿を見て、いつも敬服しております。

またここまで発展してこられたのは、社員の皆様やご家族の皆様の心を一つにした取り組みがあったればこそだと思いますし、また地域の皆様のご理解とお支えがあった賜物であると確信しております。

これからも、経済環境は日々変転し、企業経営においても様々な困難が降りかかってくるかもしれませんが、どんな時でも、未来への希望をもって世の中に光とエネルギーを届ける尊いお仕事を続けていっていただくことを念願しております。

また、関係各位の皆様には、これからも油藤商事様への変わらぬご支援を賜りますことをお願いし130周年のお祝いの言葉とさせていただきます。

創業１３０周年おめでとうございます。

彦根市長　**田島　一成**

私が代表取締役の青山裕史さんと初めて出会ったのは、忘れもしない１９９８年１月６日、当時理事長を務めていた社団法人彦根青年会議所（ＪＣ）の新入会員入会式でした。

明るい豊かなまちづくりをめざし、地域で様々な活動を展開してきた彦根ＪＣに、新入会員として入会した裕史君は、まちづくりや環境問題など多くのテーマに関心を寄せ、社業に勤しむ一方、積極的にＪＣ活動に参加してくれました。常に問題意識を持ち、先を読む卓越した力で、その後廃食油回収やバイオディーゼル燃料の精製、販売に着手し、社会をリードするきっかけと出逢ったのも、同じ頃だと記憶しています。

青年会議所卒業後も、社業との関わりはもちろん、災害ボランティアや自己研鑽の勉強会など、何かとご一緒する機会も多く、今ではすっかり私が学ばせてもらうことが多くなり、大変嬉しく思う今日この頃です。

何よりも、つれあい彩子様との結婚に際し、私たち夫婦が媒酌人を務めさせていただき、かけがえのないご縁を授かりました。どうかご夫婦お揃いで、いつまでも円満な家庭を支えあっていただきたいと願うばかりです。

ご苦労もあったであろう１３０年の道程だったと拝察します。駅伝に例えるなら、先代から託されたタスキを次の代へとつなぐことが、課せられた最大の使命だと思います。さらにゴールもなく、これから走るコースは視界不良で、想像がつかない試練が待ち構えているでしょう。それでも、タスキを握り締め走り続けてください。

とは言え、無理は禁物です。くれぐれも健康にご留意され、持ち前の明るさとバイタリティーで、さらにご活躍されますようお祈り申し上げます。

創業１３０周年に寄せて

豊郷町長　**伊藤　定勉**

油藤商事株式会社の創業１３０周年を心からお祝い申し上げますとともに、その素晴らしい足跡をたどる記念誌が刊行されますことを心からお喜び申し上げます。

貴社におかれましては、初代青山藤八氏が明治28年にカンテラ油の行商をはじめられて以来、ＬＰガスからガソリン販売、更には世界的環境意識の高まりを予見していたかのように全国に先駆けたバイオディーゼルの一般販売を手掛けるなど、積極性と先見性を併せ持ったその経営手法で長きにわたって発展を続けてこられました。

また、東日本大震災および熊本大地震、最近では能登半島地震の際、タンクローリーで被災地へ出向き、燃料を支援されている姿は大変頼もしく、豊郷町を越えて広く地域貢献されていることに深く敬意を表します。

この記念すべき１３０周年を迎えられましたのは、二代目青山藤一氏、三代目青山金吾氏、四代目青山裕史氏ならびに社員お一人おひとりの御努力の賜物と感じております。

とりわけ、裕史氏におかれましては、環境省中央環境審議会委員を務められ、環境フォーラムで講演会をされる等、その活動に深く敬意を表する次第です。

さて、本町では比較的緩やかではありますが、人口減少と少子高齢化が進んでいます。こうした状況を打破し、貴社のような地域の経済・雇用を守る元気な企業と各種施策を通じて、活気あるまちづくりを行ってまいりたいと決意を新たにしているところであります。どうか引き続き、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びにあたり、貴社がこの１３０周年をひとつの節目として、更なる発展を遂げられますとともに、社員ご一同様のご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます

祝　辞

滋賀県倫理法人会
会長　**後藤　敬一**

油藤商事株式会社様、創業１３０年をお迎えになり、おめでとうございます。

企業が創業後１００年存続できる確率は、約０．０３％と言われています。１０、０００社創業し、そのうち３社だけが１００年存続できることを意味します。会社やお店はスタートと同時に倒産の道を歩いていると言っても過言ではないと思います。そのような中で、１３０年の節目のその瞬間を迎えておられることに、心からお祝いを申し上げます。

長く続けておられる企業には、共通して不易流行の考えがしっかり根付いていると思います。経営には、変えてはならない縦軸と変えなければならない横軸があります。

何のためにこの会社が存在しているのか、創業者がどんな思いでこの会社を立ち上げたか、という創業の精神や経営理念は変わりません。それを社員一人一人に浸透させ、具現化することが大切です。てんぷら油から生成するバイオ燃料を実用化されたり、地震や豪雨災害に遭われた方々の復旧のボランティアにいち早く行かれたりする取り組みは、その実例です。ゆるぎない縦軸を持っておられます。

一方で、外部環境、お客様の好み、法律、ライバルなど時代の変化は、自社の都合を待ってくれません。この変化に素早く対応していくことが出来ないといけません。油藤商事様は、エネルギーの変遷に先回りするようにスピードを上げて変化されています。クルクル回る横軸を持っておられます。

まるで、勢いよく回っている不倒のコマです。これが、油藤商事様の真の姿です。

今後も、社員やお客様が物心ともに幸せになる経営を続けていかれ、地域の皆様に愛され、喜ばれ、信頼される企業として、君臨されることをお祈り申し上げます。

創業１３０周年心よりお祝い申し上げます

一般社団法人滋賀県ＬＰガス協会
会長　**川瀬　努**

油藤商事株式会社様の創業１３０周年、誠におめでとうございます。企業寿命30年と言われる中、１３０年の歴史を繋いでこられたことに敬意を表しますと共に、如何に世の中に必要とされてきた商売を行ってきたことが証明されていると思われます。

灯油の販売から始まった事業は時代の変化と共に形態を変えながら、ＬＰガス販売、ガソリンスタンド経営と変革をされてきました。特に、軽油代替燃料バイオディーゼルについては、全国に先駆けて販売をされました。この事業は環境を見据えた事業として注目され、近年に於かれましては、様々な賞を受賞され、益々の発展が期待されるところでございます。

特に、現会長の青山金吾様は、一般社団法人滋賀県ＬＰガス協会会長時の２０１６年には、旭日双光章の受章の栄誉に輝かれ、滋賀県内のＬＰガス業界が喜びに包まれたことを覚えています。

また、現社長の青山裕史様におかれましては、２０２４年１月の能登半島地震が発生した時には、幾日もたたないうちに支援に行かれました。更に、４月にＬＰガス事業者の仲間と共に輪島市に支援部隊を立ち上げられ、ＬＰガスの強みである、どこへでも運んで行けるＬＰガスを使用し、仮設風呂を設置されたと聞きました。ＬＰガスと給湯器と水道をつなぎ、実際にお湯が使用できるようになったことは、輪島市の被災された皆様にとても喜んでいただけたことと思います。こうした災害に強いＬＰガスの活動をいち早く行動されていることを見習い、滋賀県ＬＰガス協会も活動していかなければならいと感じます。今後も、業界の先駆けとしての知見の推進と後輩へのご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

最後に、油藤商事株式会社様の益々のご発展をご祈念申し上げます。

創業130周年にあたり、心よりお祝い申し上げます

株式会社ENEOSフロンティア
代表取締役 社長　**石川　正之**

油藤商事株式会社様の創業130周年、永年ご厚誼を頂いております株式会社ENEOSフロンティアの代表として、心からお祝い申し上げます。

130年という歳月の間には、幾多の苦難があり、計り知れないご苦労があったことと存じます。そのような歴史の中、ガソリンスタンドの枠を超えた地域循環型社会の新しいキーステーションとして捉え、「ガソリンスタンドはまちのエコロジーステーション」をテーマに、新たな取り組みに挑戦し続けていることに対し、改めて深甚なる敬意を表します。環境問題を新たなビジネスチャンスと捉えられ、環境保護とビジネスを両立させた事業を拡大されてきました。サスティナブルな社会の実現に向けた取組の先駆者ともいえるでしょう。今日の繁栄を迎えられたのも、創業時から受け継がれてきた近江商人由来の三方よしの精神に基づいたご商売に対しての並々ならぬご努力の賜物と拝察いたします。

石油業界を取り巻く環境は日々目まぐるしく変化し、石油販売業者に求められる役割（ニーズ）も大きく変わりつつあります。また、環境重視の潮流やEV車の普及等による国内石油製品需要の漸減といった厳しい状況がさらに続いていくことが見込まれます。

しかしながら、この厳しい環境下におかれましても、貴社の地域と環境への貢献を標榜する企業姿勢は、次世代に向けた先駆者として、更なる飛躍を遂げられるものと確信しております。

今般、ENEOSグループの子会社再編統合により株式会社ENEOSフィーチャスとのお取引に変更させていただきますが、より一層お役に立てるよう取り組んでまいります。

最後になりましたが、油藤商事株式会社様の益々のご隆盛と社員の皆様のご健康、ご多幸を心より祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。

祝　辞

大丸エナウィン株式会社
代表取締役 社長執行役員　**古野　晃**

この度油藤商事株式会社様が創業130周年を迎えらましたことを、心よりお祝い申し上げます。

これは、初代青山藤八様から現社長青山裕史様まで4代に亘る社長様方のご尽力の賜物と深く敬意を表します。

さて、弊社と油藤商事株式会社様とのお取引は、昭和34年にLPガスの販売のために滋賀営業所を開設した頃から2代社長青山藤一様との間で始まりました。

のちに3代社長となられる青山金吾様は、昭和46年にブリヂストン液化ガス㈱が手掛けた検針・配送合理化のための「Pグロリアシステム」を、全国に先駆けて導入され、LPガス業界での販売店様の合理化への指標となってくださいました。その後、私が滋賀支店長であった時には、京滋販売店会であるPグロリア大丸会の会長として運営などについて陰に日向に弊社を支えていただき、大変感謝しております。

また青山金吾様は、永く滋賀県LPガス協会の支部長・副会長を歴任され、滋賀県LPガス協会会長であった平成28年には旭日双光章を受章されるなど全国のLPガス業界の発展に大いなる貢献をされました。

現社長青山裕史様は、まだ再生可能エネルギーやSDGsという概念がなかった平成14年からいち早く環境問題に取り組まれ、それまで飲食店やご家庭で廃棄されていたてんぷら油を原料にしてバイオディーゼル燃料の製造に着手されました。パナソニック㈱との提携で「台所油田発見」と全国紙に一面広告掲載されたことが印象に残っております。さらにその道の権威として全国各地に招待され講演会など、バイオディーゼル燃料の普及に努められた結果、東久邇宮文化褒賞をはじめ環境関連の数々の賞を受賞されるなど大変なご活躍で、これからも油藤商事株式会社様を更なる発展と成功に導かれることと確信しております。

弊社といたしましては、これからも引き続き、油藤商事株式会社と強力なパートナーシップを築き、永くお取引をして参りたいと存じます。

最後になりましたが、油藤商事株式会社様の益々のご発展と、社員の皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

祝　辞

ブリヂストンタイヤソリューションジャパン株式会社
執行役員 京滋地区本部長　**武市　誠也**

油藤商事株式会社様が創業130周年を迎えられたこと、まことにおめでとうございます。これまでの長い歴史の中、初代青山藤八様から現社長青山裕史様まで4代にわたるご努力とご尽力の賜物であり、社員の皆様やご家族様、関係者の皆様に支えられ、これまでの歩みを成し遂げてこられたことに心より敬意を表します。

さて、弊社と油藤商事株式会社様とのお取引は、3代目社長青山金吾様との間で始まりました。ブリヂストンタイヤ特約店として、ブリヂストンオンリーでのご販売にご尽力いただき、東京表彰にも幾度となくご参加いただいております。また、4代目社長青山裕史様は早くから環境問題に取り組まれ、低燃費タイヤのご拡売、さらにはフルサービスならではのタイヤを起点とした、安心・安全をお客様にご提供いただいております。

これまでの130年、時代の変化に柔軟に対応し、数々の挑戦を乗り越え、業界内での地位を確立されてきました。多くの困難な時期もあったことと思いますが、その都度、社員の皆様が一丸となり力を合わせて乗り越えられてきたことは、まさに油藤商事株式会社様の強さの証です。

弊社といたしましては、これからも油藤商事株式会社様と良きパートナーとして、永くお取引をしてまいりたいと存じます。

最後に、改めてこの130周年を迎えられたことをお祝い申し上げ、油藤商事株式会社様の更なるご発展と、社員の皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

祝　辞

大辻税理士法人
代表社員税理士　**大辻　正樹**

油藤商事株式会社様、創業130周年、誠におめでとうございます。長きにわたり事業を継続され、地域経済や業界の発展に寄与されてこられたことに、心より敬意を表します。

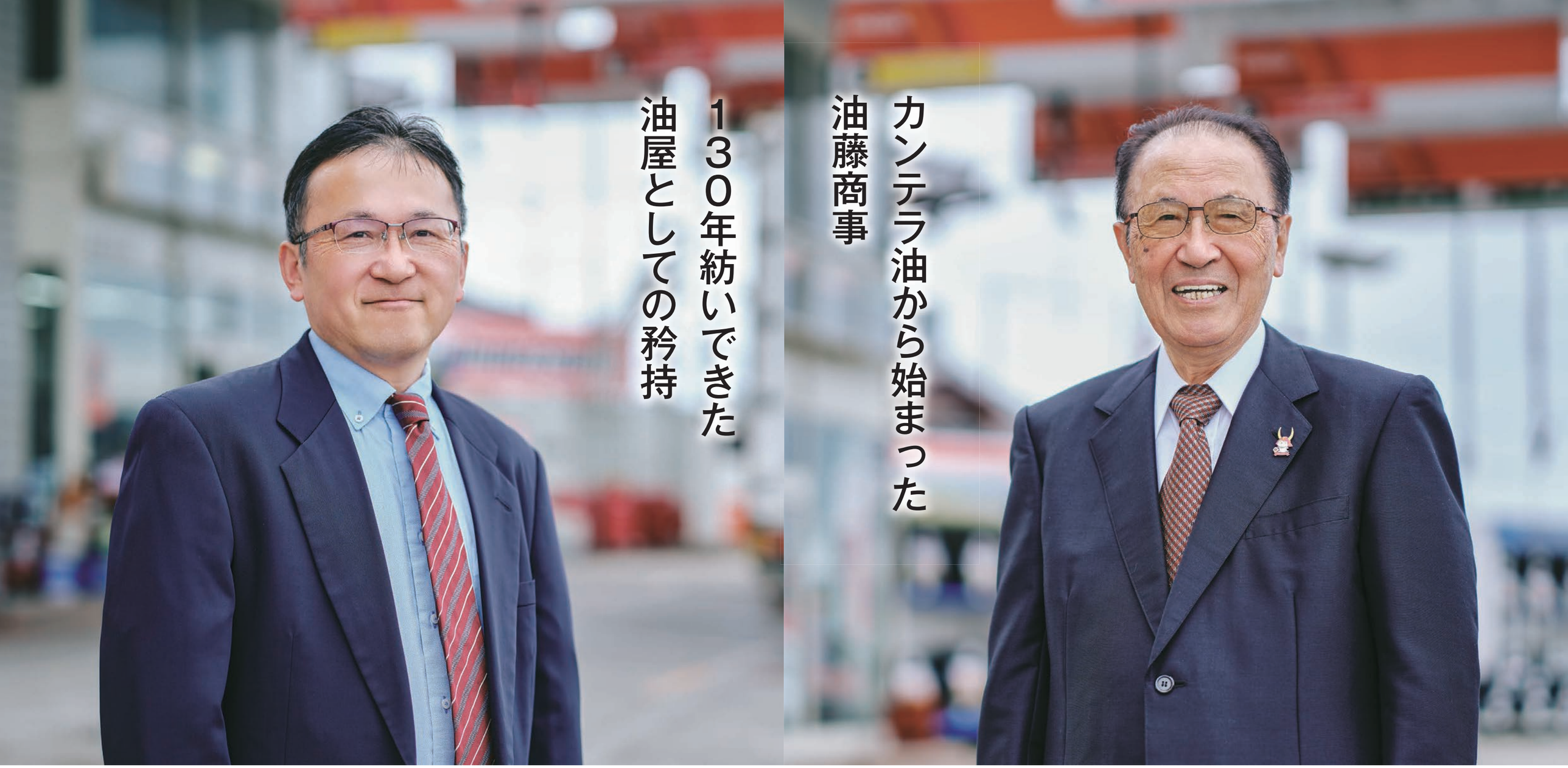
私どもは、顧問税理士として12年間、貴社と関わらせていただいておりますが、この間、貴社が給油スタンド事業を基盤に、地域のエネルギー供給を支え続けてきたことは、非常に大きな意義を持っています。さらに、環境問題が深刻となった現代において2002年2月という早期から環境に配慮したバイオディーゼル燃料の製造・販売にも取り組まれ、持続可能な社会の実現に向けた一歩を踏み出されています。

また、BCP（事業継続計画）への取り組み、特に災害時の迅速な対応には心から敬意を表します。東日本大震災や能登半島地震などの際、タンクローリーを使って燃料の供給が途絶えた被災地にガソリンや軽油を届ける支援活動を行うなど、貴社の社会貢献の姿勢は、企業の枠を超えて、地域社会に対する深い思いやりを表現しています。このような行動こそが、130年という長い歴史の中で培われた、貴社の真の価値であり、今後の事業活動においても、ますます力を発揮することでしょう。

貴社の強みは、経営陣の先見性や決断力だけでなく、現場で日々働く社員の皆様の誠実な努力にあることを、私はよく実感しております。長い歴史の中で、数々の変動を乗り越えてこられたのは、まさに全社員一丸となって取り組んできた結果だと考えています。そうした企業文化こそが、今後さらに社会の変化に対応し、新たな価値を創出し続ける力になると確信しています。

今後も、貴社が築き上げてきた信頼と実績を土台に、さらなる成長を遂げられること、そしてこれからの挑戦がどのようなものであれ、貴社が引き続き時代の先端を行く企業であり続けることを確信しております。

最後に、貴社のますますのご繁栄と関わるすべての方々のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。



カンテラ油から始まった油藤商事

130年紡いできた油屋としての矜持

カンテラ油から始まった油藤の商い

油藤商事株式会社の三代目・青山金吾、現代表取締役社長である青山裕史。ふたりが油藤商事のこれまでのことを振り返り、これからの油藤について話します。

明治28年、私、青山金吾のおじいさんにあたる青山藤八が天秤棒を担いでカンテラ油を売り始めたのが、油藤商店のはじまりです。

当時の豊郷町には電気が通っておらず、ロウソクの芯のようなものにカンテラ油をつけて火を灯していました。油は必要だけれど、庶民にドラム缶や一斗缶で油を買うようなお金はなく、一合とか5合とか少量ずつみなさんに買っていただいていたようです。大変喜ばれたそうで、初代の藤八は油売りを生業とし、いろんなことを考え始めました。

「一つのものを売ってるだけではあかん」と、当時女性たちに人気があった椿油も大八車に乗せて売り始めたそうです。"金儲けの三原則"は、軽い商品で価値の高いものを売ること。当時は、クリームやファンデーションやら、そんな化粧品と呼ばれるようなものはありませんでした。その代替品として椿油を売っていました。みんなが欲しいと思う、価値のあるものを上手に販売して成功を収めたようです。生活必需品であるカンテラ油と一緒に嗜好品である椿油を売るという藤八のアイデアは、今思えばとても素晴らしいと思います。

藤八からよく聞かされていたことは「商売は牛のよだれ。利益を焦ってはいけない。細く長く、商売を続けることが大事だ」ということ。これが藤八の哲学でした。当時は、百姓をする人がほとんどでしたが、うちの家には田んぼが多い時で5反ほど。もし1町、2町の田んぼがあれば、油は売っていなかったでしょう。農業をしていたはずです。でも、田んぼがないからこれだけじゃ食べていけないと、油に目を付けて商売を始めました。

時代が進むと、豊郷の街にも電気が通り始めます。そうなると、カンテラ油は必要なくなりました。その後、藤八は農作業に必要な日用品を椿油と一緒に持って歩き、とても喜ばれたそうです。まだ農業に従事する人がほとんどの地域で、どのようにして自分たちが食べていく道をつくるかを常に考えていたのが初代・藤八でした。

激動の昭和を逞しく突き進む
時代の波を捉え、事業は大成功

戦争で商売が中断 家族はみんな戦地へ

昭和に入ると、満州事変が起き、第二次世界大戦が始まりました。藤八の子どもは男4人。4人全員が徴兵で戦地へ。商売の間口を広げたのですが、戦争によって縮小することに。第二次世界大戦では、兄弟のうち1人が戦死しています。豊郷で初めての戦死者となり、村で葬儀を出してもらったそうです。そんな悲しい出来事もありました。戦後は、兄弟3人とも豊郷の実家へ戻ってきました。藤八は、「息子たちと油屋をしよう」と考えていたようですが、戦争を経て物資もなければ、金もない。当時、彦根にあった目加田信吉商店に「灯油を分けてください」と頭を下げたそうです。でも、代金を支払う金がなく、畑で採れたジャガイモや米と物々交換をして、売るものをなんとか集めていたと聞きます。

昭和30年代に入ると、カンテラ油の時代は終わり、石油コンロなるものが一時流行します。石油を圧縮して気化させてガス状にして燃やすものです。これは大した技術だったと思います。日本は戦争に負けてしまったけれど、こういった技術に素晴らしいものがありました。石油をガス状にする技術は戦争が生み出したものかもしれませんが、それを家庭用品であるコンロにするというのは、平和利用以外の何物でもない。うちでも扱っていた商品で、よく売れていたと記憶しています。

昭和12年 二代目青山藤一 数々の感謝状

第二次世界大戦中、資材提供を行った際の感謝状

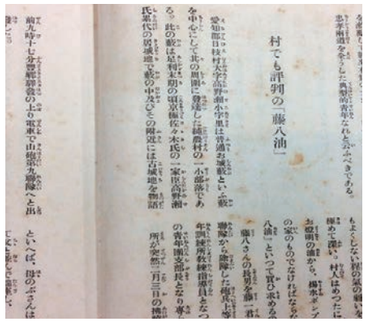
椿油の登録商標は現在も本社に残る

産業の転換期に 本格的に ガソリン販売を開始

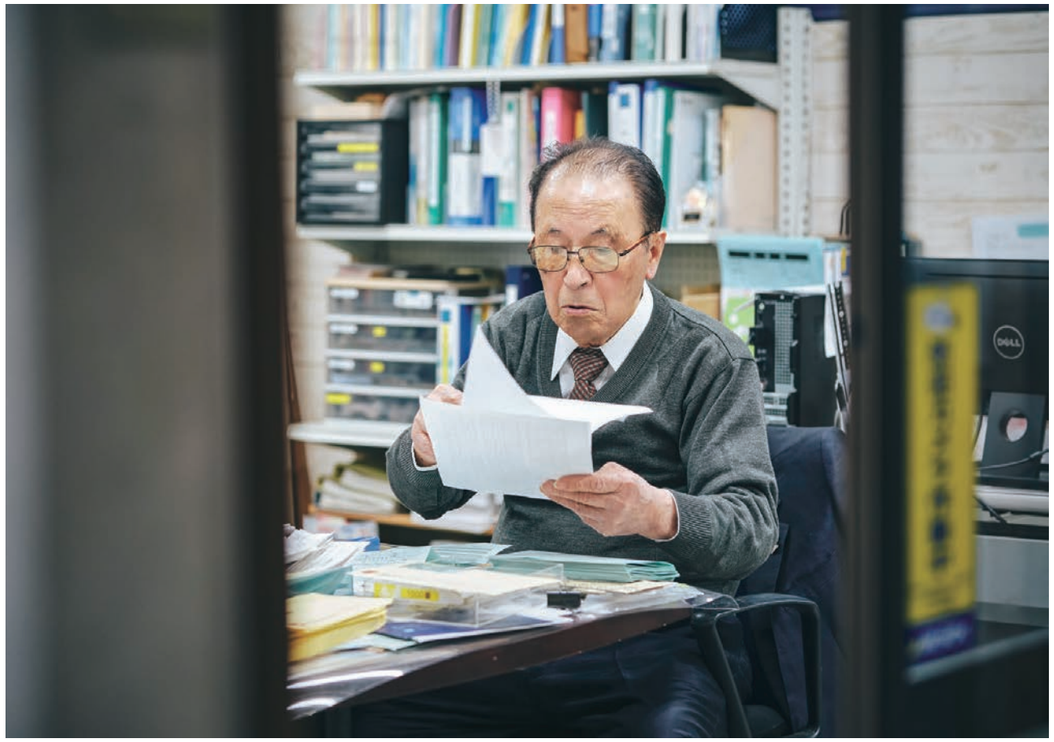
そうこうしているうちに、日本の基幹産業が石炭から石油に変わっていきました。それが昭和30年代はじめ。油藤の商売も岐路に立った時期です。大阪や東京、名古屋、横浜など主な港に石油基地が建設され、原油の輸入が始まりました。ちょうどこの時期は自動車が普及し始めた頃。「この波に乗り遅れてはいけない」と、名古屋の龍野製作所よりガソリン用ポータブル給油機を購入し、本格的にガソリンの販売を開始しました。

ところが、売るべきガソリンがない。当時、京都に「近商又一」という油の商社があるという話を、二代目の藤一が聞き、この会社に飛び込びました。その時、対応してくださったのが所長であり、会社の上層部の方。うちがどんなところかもわからないのに、近商又一の方は親身に話を聞いてくださいました。藤一は、「一度、わが家に案内する」と言って、先方の車に乗せてもらって家まで帰ってきてしまったから驚きです。

近商又一さんに座敷に上がっていただき、お茶を出して。この時、座敷にあった囲碁をご覧になり、「一局やりましょう」と2人で興じます。「もう一度、囲碁をしましょう」と盛り上がり、そこで近商又一さんが「わかりました、ドラム缶10本を早期に送ります」とおっしゃったそうです。その量、5トン。何の担保もない油藤に、さらにお支払いする現金もないにも関わらず、用意してくださったんです。売って、お金にして渡すー。そんな信用商売を許してくれた近商又一さんとの出会いが商売を大きく左右したように思います。油藤は、近商の引き合いでガソリンの安定供給が可能となる三菱石油の傘下に入ります。それまで石油に関わる取引は東近江市の村田石油さんでしたが、近商が村田石油と話を付けてくれたという経緯があったそうです（現在、村田石油はありません）。



昭和7年発行 満州上海忠誠録



昭和30年代以降の快進撃
油藤の事業はめざましい勢いで拡大

代々続く商売の哲学

その後、自動車の登場は、エネルギー産業を大きく変えていきました。昭和37年には、一般庶民にも自動車が一気に広まります。時代の流れを掴んでいた油藤はガソリンの販売という新たな事業で規模を拡大します。昭和38年には当時のガソリンスタンドの形式を取り入れ、ガソリンの販売に邁進していきました。

時代の潮流をいち早く察知していた藤一の商売人の勘はもちろんですが、"人とのつながり"がさまざまな良い出会いときっかけを生んだのではと思います。藤一の商売の哲学は「同じものを二社から買わない」ということでした。より安く油が買える元売りがいるかもしれないが、今の取引先をまずは第一に大切にしようと考えていた人です。ちゃんと筋を通して、商売をするということです。油を供給してくれる会社からしたら、「油藤は必ずうちから買ってくれる。信頼に値する会社だ」と認識されていたのだと思います。これは昭和30年代の話ですが、私が代表に就いていた頃も、息子が四代目をしている今も、80年近くにわたり、この哲学を守っています。

現在も油藤の大切な事業の一つであるLPガスの販売も、昭和30年代からです。今の大丸エナウィンとなる会社が近くにできました。この時の初代所長である青木さんという方が、それはそれは立派な方でした。車に乗れないものだから、オートバイの荷台に10kgのガスボンベを積んで持ってきてくれて。青木さんから「お宅にはトラックがあるんだから、息子さんにボンベを取りに来させて。その場合は、費用を安くしておく」というようなお話があったようです。免許を取った私がこの仕事を任されました。近江商人の鏡のような方で、今に至るまで良いお付き合いが続いています。

昭和43年、油藤を法人化へ

昭和42年1月27日、私が結婚しました。それまでは二代目の藤一と私、弟で仕事をしてきましたが、銀行で勤めていた家内も仕事を手伝ってくれるように。その翌年、43年に油藤商事株式会社として法人化します。父・藤一が初代の代表取締役に就任しました。資本金100万円、当時の年商は1000万円でした。

それまでは売上を家族で分け合う形でしたが、これからはみんなで給料を取ろうということになりました。藤一は、こういったことを考えるのが苦手だったもので、私を商業科のある高校に通わせて、簿記の勉強をさせたんです。高校2年で簿記一級を取り、大学は仕事の傍ら滋賀大学経済短期大学部（現在の滋賀大学夜間主コース）で経済を勉強しました。簿記や経済の勉強をしたことは、その後の事業においても大いに役立ったと思います。

ENEOS 彦根インターSS

ENEOS 豊郷SS

法人化後、事業がどんどん加速 江洲石油会社を買収

昭和47年に株式会社江洲石油を買収。これは、大きな転機でした。後継ぎがなく、閉鎖するしかないというところで、油藤に買収の打診がありました。それと同日、あるプロパンの会社を面倒見てほしいと連絡が入りました。こんなことって、あるのかと…。ひとまず、私の弟が江洲石油の瀬田にあるスタンドを偵察に行きました。そうしたら弟が「規模が違う、ガソリンの方が面白いはずだ」と報告してきたんです。プロパンガスは家庭のエネルギーとして、私たちの地域ではまだまだ需要がありました。「ガスはどうする?」と言いかけたけれど、2つを追うと1つも得ることができないということわざのように、私たちはガスを近くの会社に引き継ぎ、油藤はガソリンスタンドの運営を選びました。その結果、扱うガソリンの量がこれまでの倍以上に。昭和48年には、5万リットルの灯油備蓄基地を建設し、事業を拡大させるべく、みんながひたすら汗を流した時代でした。

オイルショックにも動じない強さ スタンドの買収が功を奏す

昭和48年に第一次オイルショックが起きました。しかし、灯油備蓄基地をつくったこと、その前年に瀬田のガソリンスタンド運営を担ったことで、私たちはこの難局を乗り切ることができました。油が潤沢になったことで、私たちはガソリンを売ることができたんです。世間は「油がない」と大騒ぎとなり、経営が厳しくなる会社も出てきていたと思います。油藤は、昭和47年に決断したことがきっかけで躍進を遂げることができました。瀬田のスタンドを買収していなかったら、会社はダメだったかもしれない。ピンチが起きそうになると、その前に何か決断をしている…。良いように捉えると、そんな風に難局を乗り切ってきたと考えることもできます。

ENEOS 大津瀬田SS

青山金吾が三代目代表に エネルギー事業で売り上げを拡大

昭和54年本社ビル竣工

第二次オイルショックの最中でしたが、昭和54年、油藤商事は豊郷に本社ビルを構えることになりました。メインバンクである滋賀銀行さんには、当時よりお世話になっており、この時もすぐに相談に乗っていただきました。当時で建築費用が4500万円。あの時代に豊郷に3階建てのビルが建つのは珍しいことで、お披露目にはたくさんの街の方が来てくださいました。

その翌年、父・藤一が亡くなり、私が代表取締役に就任しました。藤一の葬儀には、屋敷の倉庫からスタンドの先まで列ができるほど、多くの方が参列してくださいました。油藤がこの街に根付いていた証かもしれません。

また、この時代になると、ほとんどの方が自動車に乗っていました。平均して月に100kℓのガソリンが売れれば上等でしたが、昭和54年の12月、ガソリンが125kℓも売れる快挙。大晦日の日は洗車で2時間待ちになるなど、ガソリンスタンドが最も多忙な時期であったと言えます。

また、昭和55年には、豊郷町の水道工事公認業者に認可され、油屋から一歩事業を広げて設備工事にも乗り出しました。その後、昭和60年には、豊郷給油所を全面改装して、地下タンクを増設しました。平成5年には、瀬田、豊郷2つのスタンドで年間2000kℓのガソリン販売量を突破します。会社の売り上げとしても平成に入る頃には5億円に。順調に実績を伸ばしていた時期で、ひたすら仕事に打ち込んでいた時代でもありました。

平成に入り 着実に業績を伸ばし 資本金は5000万円に

平成8年には、下水道宅内工事の豊郷町公認業者に認定され、翌年には下水道宅内工事の甲良町他、近隣市町村の公認業者に認可されています。油屋の仕事に加えて設備工事の仕事にも着手したことで、会社として受けられる業務の幅や規模が変わってきました。設備工事を請け負ってから一時は年間5000～6000万円の売り上げがありました。本業の油屋を支える事業となり、会社を大きくすることに貢献したと思います。

平成11年には、資本金を5000万円に増資しています。このタイミングで株式会社江洲石油から設備一式を買収するなど、事業規模が年々拡大していった時期でした。

本社ビルで さまざまな事業も

本業からは少し逸れますが、過去にビルの3階で学習塾をしたこともありました。教えていたのは、私や大学生たち。今のように塾もなかった時代ですから、これがかなり儲かりました。また、私の母親が日用品を販売していたこともあります。豊郷は周りにお買い物する場所が少なく、日用雑貨やおもちゃ屋さんの需要がかなりありました。元旦におもちゃ屋を開けたら、なんと100万円も売れてしまったんです。スタンドはそっちのけ。本気でおもちゃ屋をやろうかと考えたことも（笑）。少しでも商売になりそうなものがあれば、試していました。それも、今となれば良い思い出です。

父から息子へ四代目の新しい挑戦が始まる

研究熱心な四代目 油屋の新しい形を模索

現在の油藤商事・代表取締役社長である息子の裕史は、大学卒業後、家業を継ぐために三菱石油で3年間、仕事をしていました。こちらへ戻ってきてからも精力的に取り組んでくれています。ある時、「天ぷら油で車が動く」という話を聞いたそうです。そのことに興味を持った彼は、すぐに動きました。自分で調べてバイオディーゼルの研究をする会社へ話を聞きに行ったようです。「自分で調べて飛んでいく」、その勢いと熱意、スピード感は大したものだと思います。それからは、この豊郷でバイオ燃料に心血を注ぎ、今はプラントを造るまでに成長されてくれました。

バイオ燃料の将来性

あるとき、滋賀県の経済界の方々が集まる場でバイオ燃料の話をしたことがありました。それを聞いた滋賀銀行の頭取が「青山さんの息子さんが取り組んでいることはすごいことだから、すぐに支店のものを向かわせる」と仰ったんです。そこから話はとんとん拍子に進み、融資がすぐに決まりました。滋賀銀行もエコビジネスのサポートを始めた頃で、時代の流れにうまく乗ることができたのでしょう。バイオ燃料の開発と研究が社会のためになり、また、ビジネスとしても有意義なものであると実感しました。

新しい技術やビジネスは大切ですが、私の役割はガソリンを主軸としたガソリンスタンドの仕事をしっかりと守って、経営の基盤を図ること。裕史には新しいエネルギーに関する事業を進めるべく、邁進してもらう、この2本の柱でやってきました。ガソリンスタンドの仕事は「3K」と呼ばれる職業の一つだと思います。でも、生活には絶対必要なもので、なくなることはないでしょう。しかし、業界は縮小され、最後は淘汰されていくはずです。

エネルギーを扱う総合ステーションへ

国のエネルギー政策方針において、2030年代にE20対応車の新車販売比率を100%にし、バイオ燃料の導入拡大による低炭素ガソリンの供給を開始する目標が設定されています。また、自動車各社にはバイオ燃料を搭載できる自動車の開発が示されています。今、油藤商事で進めているバイオ燃料の取り組みは、その政策に合致していますし、裕史がいち早く進めてくれていたおかげでこの分野でのリードもあります。私たちは、いろんなものに追従し、対応していける「総合エネルギーステーション」であるべきだと考えています。油藤商事が始まった頃のカンテラ油から石炭、灯油、石油、そしてバイオ燃料とさまざまな油を売る仕事をしてきました。いつの時代も近江商人の「三方よし」を心に、商いを続けてきた結果が、今の業績や会社の拡大に繋がっています。

平成28年、青山金吾が旭日双光章受章

平成28年春の叙勲において、青山金吾が旭日双光章を受章しました。油藤商事の代表として、また滋賀県LPガス協会の役職を長きにわたり務めてきたことが評価されました。約200社が参画する滋賀県LPガス協会においては、分社化や利益改善などさまざまな難局がありました。その度に、油藤商事の事業と同様、守るべきものと変革するべきものを織り交ぜながら、的確な経営判断と改革を行い、消費者が安心して利用できるLPガスを提供してきました。

叙勲のパーティーは大津プリンスホテルで行われ、280名が列席。滋賀県知事の三日月大造氏をはじめ、滋賀県選出の国会議員や全国LPガス協会の会長らが参加してくださいました。

安倍元総理と記念撮影

金婚式お祝いの似顔絵

時代は新世代へ
油屋として社会のために
～強みを生かした社会貢献～

平成31年、油藤商事の四代目・代表取締役に就任した青山裕史は、これまでの事業を継承しつつ、バイオ燃料という新たな分野にも挑戦してきました。また、地域のエネルギー供給に関わる事業者として、災害支援や障がい者雇用にも積極的に取り組んでいます。「油屋」として社会のためにできることを考え、困っている人や場所に惜しみなく物資や技術を提供しています。

災害支援への思い 3・11が、はじまり

災害支援を始めたきっかけは、東日本大震災です。震災の翌日に青年会議所時代の友人からメールが届きました「千葉では夕方まで燃料が持たないです。名古屋でも大阪でも取りに行くから、燃料を用意できないか」という内容でした。千葉から大型のタンクローリーが来て、そこへ詰め替える作業をしました。そのすぐ後、別の方から「家畜用の暖房燃料が足りず、このままでは家畜が死んでしまう。軽油を分けてほしい」というメールが入り、至急対応しました。そうこうしていると、次はコープしがからの依頼が。仙台まで食料を運ぶコープのトラックの後ろについて、タンクローリーで4000リットルの軽油を運びました。それが震災の6日後のことです。現地へ向かう道中は、自衛隊や消防、レスキューばかり。私は戦争に来たような感覚で、不謹慎ですが怖かったことを覚えています。

支援を終えて滋賀に戻り、3月末にもう一度仙台へ向かいました。そこでは、ガソリンを買うために長蛇の列が。5時間並んで10リットルを手にすることができる…。この現代の日本にこんなことが起きるなんて。油屋として仕事をしてきて、大きな衝撃を受けました。

そのー年後、そして10年後にも東北を訪ねています。福島の避難区域は10年経ってもまだ復興ができず、何もかもが震災当時のまま放置されています。これは、子どもたちに伝えなければならないと、私は小・中学校や高校、大学でも震災支援についてお話をさせてもらっています。

広がるボランティアの輪 BCP対策の重要性も

東日本の支援に始まり、熊本地震や能登半島地震、豪雨災害が起きた地域に入り、燃料の提供や震災した家屋の掃除なども行ってきました。活動が新聞などで取り上げられると、「青山くんだけでなくて、私たちもやろうか」と声がかかり、能登の公民館と集会所に仮設のお風呂を届けてくれた同業者が現れるなど、支援に賛同してくれる人が増えてきました。今では、ボランティアを募集すると、行ける人が手をあげて来てくれるー。そんな仲間がたくさんいます。

この災害支援を通して企業の災害等におけるリスクマネジメント、いわゆるBCP（事業継続計画）対策として、さまざまな企業と災害協定を結ぶ重要性を痛感しました。東北の支援で行動を共にしたホームセンターのカインズさん、コープしがさんなどは今もお付き合いが続いており、弊社のバイオ燃料事業にもご協力をいただいています。

コープしがさんと共に東日本大震災の支援に向かう

NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）の「負けてたまるか」のユニフォーム

熊本支援　阿蘇消防給油

災害支援の軌跡
～油屋としてできることを～

2011年3月　東日本大震災　仙台市コープみやぎさんの車両給油
当社の災害支援のきっかけとなった取組み

2016年5月　熊本県阿蘇市　熊本地震の倒壊家屋の片付け
ダッシュ隊の仲間たち

2018年7月　ボランティア活動の合言葉「できる人ができる時にできる事をする」　大阪地震吹田市社会福祉協議会ボランティアセンター

2020年7月　岐阜県下呂市豪雨災害現場
心援隊びわ湖チームと全国からの仲間たち

2022年1月　彦根市大雪　全国からボランティア仲間が集結
彦根市社会福祉協議会ボランティアセンター

2022年8月　福井県南越前町　心援隊びわ湖のメンバー
浅野裕史隊長と川上貴史君

2023年8月　ボランティア仲間　助さん（吉村誠司）と社長と
菜桜（長女）、充歩（次女）　ENEOS彦根インター給油所

2024年1月　能登半島地震　発災3日目に燃料給油支援に
石川県志賀町役場

GSの仕事は環境に悪いー 真剣に考える時が来た

バイオエネルギー開発のきっかけとは

私がバイオエネルギーの開発に着手したそもそもの理由は、「ガソリンスタンドの仕事は、環境に悪いことをしている」という思いから。地球温暖化の原因となる排ガスをもたらすガソリンや軽油の販売、不法投棄されるタイヤ、たくさんの水と洗剤を使う自動車の洗浄、何をやっているんだというほどに環境に悪い。ガソリンスタンドの仕事は環境に負荷をかけながら商売が成り立っているのですが、世間はこの業界を「環境に悪い」とは責めない。業界の人間も同じです。だから、私は真剣に考えて議論すべきだと発信し続けています。

資源ごみの回収からスタート

そこで始めたのが、資源ごみの分別回収です。日本で初めてスタンドにボックスを設置し、アルミやペットボトル、プラスチックなどを回収する業務をスタートさせました。例えば、お客様がガソリンを入れに来て、そのついでに資源ごみを置いていく。自治体のごみ回収は限られた日だけですが、スタンドは曜日関係なくいつでも回収可能に。世間では「リサイクルしましょう」と叫ばれていますが、その受け皿がなければ意味がありません。スタンドのスタッフは、汚れたものを扱うことに慣れています。さらに、お客様から「ありがとう」と言っていただけることで、スタッフのモチベーションも上がりました。いつでも家庭のごみを出せる受け皿となり、本来、ごみを回収する行政の足りない部分を補う。そして、私たちにとってはスタンドへの来店動機をつくることができる。誰も困らない仕組みは、近江商人の原則です。"三方よし"が、ここに成り立ちます。

天ぷら油で車が走る?!

青年会議所（JC）の入会説明会の懇親会で隣席の杉原正樹さんから「天ぷら油で車が走るって聞いたんだけど、本当に?」と話しかけられました。「そんなわけない」と思いつつも、そこから気になり、調べてー週間後には研究している方に会いに東京へ向かいました。

使った油は廃食油として捨てられますが、そこにある加工物を加え、化学反応を起こします。不純物を取り除いたものを何度も水で洗い、最終的に水を抜いたものがバイオディーゼルになります。ディーゼル車は、灯油や重油でも走るくらいエンジンが素晴らしい。利用可能な燃料の幅が広く、バイオディーゼルも利用できるというわけです。

古河 AS 秦荘工場 機械オイル交換

ローソン店舗で出た廃食油をリサイクルしたバイオ燃料でローソンの配達車に給油

本社の敷地内に施設をつくり、バイオディーゼルの研究、精製に取り組んできました。何度も失敗し、試行錯誤を続けてどうにか完成。今から25年前に日本で初めてバイオディーゼルの販売を油藤商事が行いました。当初は、「天ぷら油の燃料で何かつくって、事故なんかしたら、お前は責任を取れるのか」と、多くの反対を受けました。でも、環境への負荷を減らそうとする時代に入り、ガソリンはエネルギーの主役を終えようとしています。新しいことをしていると思われがちですが、油藤の原点に戻っただけ。植物由来の燃料をビジネスにすることは、ごく自然な流れだったのです。

ビジネスに物語を大企業とも対等な取引

現在、取引があるのは、コープしがや滋賀県内のローソン、パナソニック、鹿島建設、西濃運輸、日本通運（NX）など、大きな企業とバイオディーゼルを通してお付き合いがあります。ローソンは、店舗で使用した揚げ油を回収し、それをもとにバイオディーゼルを精製。県内を走る配送トラックの燃料として使用してくださっています。また、日本通運（NX）では物流大手としてCO2の削減が大命題となっていて、バイオディーゼルを使用していこうという動きです。社員食堂や従業員の家庭から廃食油を回収して燃料に転化します。

国の施策であり、世界規模の取り組みであるCO2ネットゼロに向けた社会の流れの中で、各企業は頭を悩ませています。私の仕事は、この社会の中でいかに企業価値を高めることができるストーリーをクライアントに提供できるかだと考えています。商品を売るのではなく、ストーリーを売るのです。そうすることで、私たちのような中小企業であっても大手と対等にパートナーシップを築き、価格交渉をせずともビジネスが成立します。

技術はフルオープン与えれば、必ず返ってくる

このビジネスは、私たちだけに留めておくのではなく、「知りたい」という方々に技術や情報をフルオープンにしています。これでは「あんなに開発コストをかけたのに損するのでは」という声も聞かれますが、その答えには「NO」です。情報を提供することで、信頼関係が生まれ、新たなご紹介へと繋がります。私は、お金は最後に付随してくるものという考え方です。利益ばかりを追うのではなく、何かを提供し、与えた後にそれが利益となって返ってくるー。震災支援も然り、はじめから狙って何かを提供しているわけではありませんが、お手伝いをした先に回り回って、私たちのところに良い形で戻ってくる。これが私の経営哲学と言えるかもしれません。

西松建設湖南現場
バイオディーゼル燃料給油

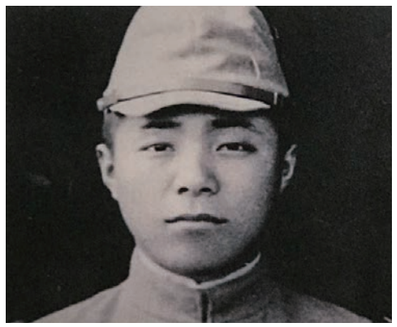
NEXCO中日本・西日本
各基地の除雪車両に給油

油藤の中心にある
忘れてはならないこと
尊い命に守られ
生かされている

東京から豊郷へ戻り、事業に邁進する中で、大切に抱いてきた思いがあります。それは、家族の歴史において忘れてはならない、私の大叔父にあたる青山要三郎のことです。彼は、豊郷の街で1人目の、青山家でも唯一の戦死者です。

彼は、過去の大戦中、関東軍ハイラル第八国境守備隊第五地区歩兵として旧満州へ出征しました。要三郎がいた旧満州国のハイラルは、ソ連軍からの侵攻に備えるべく、要塞がつくられた街。ここに若くして赴き、任務に当たっていたそうですが、昭和16年12月1日、彼は任務中の不慮の事故で亡くなります。21歳でした。移動中にトラックから転落したと聞き伝わります。奇しくも、亡くなった私の兄の誕生日が12月1日。生前、兄は「俺は、要三郎の生まれ変わりだと思う」と話していたことを思い出します。ただならぬ縁を感じていた私は、要三郎の足跡を辿り、彼が見たであろう景色をこの目で見たいと平成30年6月にハイラルへ向かいました。

日本 関東軍第八国境守備隊 ハイラル要塞の碑


関東軍第八国境守備隊第5地区歩兵
青山要三郎　21歳

中華人民共和国内モンゴル自治区フルンボイル市
世界反ファシズム戦争ハイラル記念公園

約3日間かけて ハイラルへ 生きた証を探して

北京からハルビン、そしてハイラルへ。約3日をかけて現地に到着。そう簡単に行ける場所ではなく、当時を思うと本当に苦労して辿り着いたのだろうと感じました。訪ねた戦争記念博物館は、関東軍第八国境守備隊がつくった地下要塞の上に建てられたもので、あらゆるところに日本語が残されていました。

また、私が訪ねた6月は気温も程よく、空がとても近くて美しい光景が広がっていましたが、要三郎が亡くなった12月にはマイナス40度になるのだとか。今は、温かいダウンやヒートテックのような肌着もありますが、当時は何もない時代。どうやって過ごしていたのか、何を思って生きていたのか―。考えずにはいられませんでした。

案内してくれたガイドさんは「戦争では日本とさまざまな悲しい出来事もあったけれど、この街のベースをつくったのは間違いなく日本軍（関東軍）なんだ」と。「病院や学校、街のインフラが整っているのは、日本軍（関東軍）がいたからだ」と話してくれました。短い一生ながら、要三郎が生きた意味はきちんとあったのだと、強く心を揺さぶられたのです。

130年続いてきた奇跡 守ってくれる人の存在

私たちの会社はカンテラ油から始まり、今に至るまで130年続いています。その間、紆余曲折はありましたが、順調にここまで事業を続けてこられたのは、要三郎が守ってくれたからだと感じるのです。要三郎という若くして亡くなった青年が負の部分を引き受けてくれたから、私や父は会社の代表という陽の部分の仕事を担えたのではないかと強く思うのです。会社の中心には、要三郎の石碑が建てられています。彼が油藤のこれまでの歴史において、一つの軸であるということを、忘れてはいけないと思っています。

暮らしの手段を販売する サービスステーション として

130年目を迎え、これからも事業を紡いでいくにあたり、これまで130年間守ってきた油屋としてのスピリッツをしっかり残していく必要があります。業界では、油外商品と呼ばれるタイヤの販売やカーリースなどで売上を立てることが一般的ですが、私は、油屋の本懐であるエネルギー燃料以外で商売をするつもりはありません。

現在は、ガソリンを売っていますが、将来はガソリンを売らないスタンドになるかもしれません。初代は、椿油を売り歩き、二代目ではモータリゼーションの時代にガソリンを売り、そして私はバイオ燃料を開発・精製し、多くの企業に供給しています。時代の変遷にあわせて、油藤は暮らしに必要なエネルギーを販売してきました。

初代が売っていたものは植物油、私がつくっているものも植物由来。130年経って、最初に戻ってきたのです。そのことに気付いた時、私が行ってきた仕事は間違っていなかったと確信しました。油藤商事には、これまでもこれからも暮らしを支える手段としてエネルギーを供給するミッションがあります。私たちが掲げている「まちのエコロジーステーション」とは、まさにそれを体現する形であり、場です。

時代の流れはとても早いですが、変化はあえてスローに。ゆっくりと確実にしっかりと事業を進めていく中でも、過去へのリスペクトを忘れず、今があることに感謝をしたいと思います。

会社の中心にある要三郎さんの石碑前で初代、二代目も一緒に
後ろには招霊木が植えられている

祝　辞

糀谷社会保険労務士事務所
代表 **糀谷 博和**

創業130周年、おめでとうございます。初代青山藤八氏に始まり、4代目である青山裕史氏へと長きにわたり会社を続けてこられたことだけでも、すごいことだと思いますが、その中で業界をけん引する活躍をされている姿をおみかけしております。青山金吾会長におかれましては、長年の活躍が認められて旭日双光賞という名誉ある勲章を授与されたことは、非常に素晴らしいことです。創業時より連綿と受け継がれてきた近江商人としての誇りと信頼が、これらの裏付けとなっているものだと思います。

また本業に加え、バイオディーゼル事業など革新的な取り組みも行われ今後も益々、活躍が期待されるところです。今後の益々のご発展とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

ソニー生命保険 滋賀支社
井口 雅文

この度は、油藤商事株式会社の創立130周年を迎えられたこと、心よりお祝い申し上げます。

貴社とのご縁は34年前に遡ります。高校の同級生である裕史氏に誘われアルバイトとして働かせてもらったことから始まりました。おかげでマイカーの簡単な整備は自分で出来るようになりました。

その後も友人として、会社の担当ファイナンシャルプランナーとしてお付き合いさせてもらってます。

裕史社長はその豊かな発想力で新たなガソリンスタンドのビジネスモデルを開拓してこられました。ガソリンというエネルギーを供給することに留まらず、地域貢献の最大化を常に考えた行動・姿勢には感激させられます。

今後も様々なことに挑戦されると思いますが、その成長過程を伴走支援できたらと考えております。

末筆ながら、油藤商事株式会社の一層のご発展と皆様のご活躍を祈念いたしましてお祝いとさせていただきます。

大辻税理士法人
監査課 **糸永 泰章**

創業130周年をお迎えのこと心よりお祝い申し上げます。地域社会への貢献とエネルギー業界の牽引に多大なるご功績を残されたことに深く敬意を表します。

「てんぷら油で車が走る」この言葉に衝撃を受けたのは私が貴社の担当となった十二年も前のことです。当時から経営陣や社員様の誠実さと日々の弛まぬ努力と情熱を感じておりました。時に災害など緊急時には、支援活動の為いち早く被災地へ駆けつけ燃料を届けるお姿に大変感銘を受けました。環境や社会、人と人との繋がりを大切にされる貴社の企業精神こそが今日までの輝かしい歴史を築いてこられたのだと思います。

最後に皆様のご健勝とご多幸を祈願し、今後もさらなる発展と飛躍を遂げられることを心より願い、益々のご成功をお祈り申し上げます。

有限会社馬庭長浜保険
代表取締役 **馬庭 將行**

裕史社長とのお付き合いはお仕事でご縁をいただくずいぶん前からになります。当時から街づくりや災害ボランテイアにかかわっていた私にとって、社長のその分野での行動力は非常にまぶしいものでした。そんな中、東日本大震災が起こり、震災3日目にタンクローリーに油を積んで仙台に走った社長の行動力は今もボランテイア仲間の語り草になっています。その後の災害ボランテイアでのご活躍は周知のとおりです。私の勝手な私見でありますが、社長の行動からは常に「油屋の意地」「近江商人の心意気」が感じられるのです。

今後もぜひ「油屋の意地」と「近江商人の心意気」でもってますますご発展されることをお祈り申し上げます。130年はとてつもない年月です。心よりお祝い申し上げます。

やまと舞
舞主 **やまとふみこ**

油藤商事株式会社様、創業130周年という歴史ある節目を心よりお祝い申し上げます。地域とともに歩み、伝統と信頼を積み重ねてこられた御社に深い敬意を表します。私はやまと舞舞主として、彦根市倫理法人会を通じ青山社長とご縁をいただき、日本の伝統文化「舞」へのご理解と温かいご支援に日々感謝しております。

やまと舞は、日本人の精神性を身体を通して表現する舞です。足の先から頭の先まで意識し、想いを込めて見えないものを見つめる心を大切にしております。こうした価値観に共鳴し、舞という無形の文化に光を当ててくださる青山社長の姿勢は、まさに「人を大切にする」企業理念そのものだと感じております。

これからも油藤商事様が、地域と共に発展、変革と挑戦を続けられますように心より祈念いたします。

NPO 碧いびわ湖
藤井 絢子

江戸の文化を彷彿とさせる、カンテラ油を天秤棒で担いでの行商に始まるのですね。椿油なども手がけた慧眼が、油藤商事さんの土台をなすことに、今につながる初代からの未来性を感じます。

4代目青山裕史さん26才(1999年)の時に、当時私が理事長をしていた環境生協開発のBDFに着目なさった。"天ぷら油で軽油代替燃料製造?"と、世間では真新しさへの注目は有りはしたものの"社会化"からは、程遠い時期でした。だからこそ、1980年代からドイツの現地視察を重ね、BDFの将来性に着目していた私にとって、裕史さんの挑戦に、大きな勇気を得た思いでした。

三代目父上の心配は、いかばかりだったかと、今でも冷や汗ものです。その後の目ざましい活躍は、全国レベルで大きな評価を得るに到り、今なお進展にアクセルがかかっています。BDFの、ネットゼロ社会実現への価値は、今後更に重要度を増すと確信します。

よくぞ挑戦下さった。そして130年の油藤商事さんの歴史を、更に、地域と共に、そして地球を意識しながら発展されますよう!

豊郷給油所
所長 **丸橋 完次**

油藤商事株式会社が創業130年という節目を迎えられましたこと、まずは長年にわたりご支援・ご愛顧いただいたお客様、地域の皆様、そして日々努力を惜しまぬ社員スタッフの皆様に心より感謝申し上げます。

私たち豊郷給油所も、その一翼を担う現場として、地域の皆さまに安心と信頼をお届けすることを使命として日々努めてまいりました。

私が入社して、最初は大津瀬田給油所でタンクローリーで配達業務に携わり、その後豊郷給油所に異動になり、所長を務めています。日々の業務のほかに、様々なことを任せていただいており、今後もしっかり業務をこなしていきたいと思います。

今後も「地域に根ざしたサービス」を大切にし、社員一同さらなる飛躍を目指して精進してまいります。

130年の歩みに感謝を込めて、心からの祝意を表します。

彦根インター給油所
所長 **池内 浩**

油藤商事株式会社が創業130周年という大きな節目を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

私たち彦根インター給油所は、高速道路に入る直前の最後のサービスステーションとして、地域の皆さまはもちろん、遠方から訪れる多くのお客様にとっても大切な存在でありたいと、安心・安全を最優先に日々の業務に取り組んでおります。

また、高速道路関係者の皆さまとも信頼関係を築きながら、交通インフラの一端を担う責任を強く感じています。

130年にわたる歴史と伝統は、創業者の想いと、それを支えてこられた多くの先輩方の努力の結晶です。

その重みを胸に、社員一同、次の時代へと確かな歩みを進めてまいります。

今後のさらなるご発展を心よりお祈り申し上げます。

事業案内

ガソリンスタンド業務

ENEOS 豊郷 SS

〒529-1173
滋賀県犬上郡豊郷町高野瀬645
平日 7:00～19:30　日・祝 7:00～19:00
TEL: 0749-35-2081　FAX: 0749-35-2083

昭和54年に完成した本社ビルを中心に、油藤商事の事業の中枢を担う。ガソリンスタンド業務をはじめ、バイオディーゼルの製造工場、給油ステーションを備える。

ENEOS 彦根インター SS

〒529-1173
滋賀県彦根市里根町269-1
平日 7:30～20:00　日・祝 8:00～20:00
第1・3日曜日定休日
TEL:0749-22-9206　FAX:0749-22-9286

油藤商事にとって3番目のガソリンスタンド。彦根インターチェンジ前、最後のスタンドとして、観光や商用での利用が多い。彦根の玄関口を支える役割を担っている。

ENEOS 大津瀬田 SS

〒520-2152
滋賀県大津市月輪1丁目9-21
平日 7:30～21:00
TEL: 077-545-2390　FAX: 077-545-9345

昭和47年に設立。現在は株式会社江州石油が運営する。セルフ式のスタンドが多い中、唯一のフルサービスのスタンド。国道1号線沿いということもあり、地域の方の利用も多い。

BCP支援

災害や火災などによる損害を最小限に、かつ事業の継続や早期復旧させるための方法を取り決めるBusiness Continuity Plan(事業継続計画)の推進を支援します。

バイオディーゼル燃料

てんぷら油などの植物油からつくられる、バイオディーゼル燃料(軽油代替燃料)の製造販売を2002年2月から開始。環境問題の改善に貢献しています。

燃料配達

軽油・灯油・A重油・バイオディーゼル燃料の配達を行っています。配達地域は、当社グループの近隣地域および滋賀県内の各地。同業者の代行給油も行います。

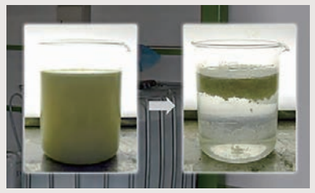
LPガス販売

業界に先駆けて、利用状況を見守るLPガス集中監視システムを導入。異常を感知した際は集中監視センターで状況を確認。必要に応じて出動、対応を行います。

設備工事・リフォーム

上下水道水道排水設備認定工事店として、ガス・灯油機器の設備工事を行っています。水回りの改修、住宅リフォーム工事など、お気軽にご相談ください。

バイオフロックAK



バイオディーゼル燃料を精製する際、洗浄時に発生する排水の処理方法を凝集剤メーカーと共同開発。処理剤の販売を始め、システムをトータルでサポートします。

事業の戦力となる障がい者雇用

現在、油藤商事では1名の障がい者スタッフが仕事をしています。これまでにも多くのスタッフを雇用し、地域の障がい者雇用に貢献してきました。

「数々の失敗もしてきました。また大変なこともたくさんあります。しかし、人手不足の昨今、彼らができることで仕事に取り組んでくれることは大きな戦力になります。これからも機会があれば採用を続けていきたいと思っています」。(青山裕史)

会社概要

会社名　油藤商事株式会社
設　立　昭和43年
資本金　50,000,000円
代表者　代表取締役 青山裕史

明治28年（1895年）　初代青山藤八（当時15歳）屋号を油藤商店として天秤棒にてカンテラ油（灯油）の行商する
昭和元年（1926年）　カンテラ油の他、女性の椿油も扱い、大八車にて行商。戦前まで広範囲に行商を展開
昭和30年（1955年）　千堂（現高野瀬）の油屋として活躍
昭和33年（1958年）　当時の村田石油店（八日市・現東近江市）との出会いにより二代目 青山藤一が家庭用の石油コンロの燃料である灯油の販売に参入を開始する
　LPガスの販売に着手する
　東京タワー竣工
昭和34年（1959年）　自動車時代の幕開けで、徐々に自動車の台数が増え始める
　名古屋の龍野製作所よりガソリン用ポータブル給油機を購入し、本格的にガソリンの販売を開始する
昭和38年（1963年）　当時のガソリンスタンドの形式でガソリン販売に邁進する
　日本初の高速道路が開通
昭和43年（1968年）　油藤商店を法人化し、資本金¥1,000,000にて
　油藤商事株式会社として設立
昭和47年（1972年）　初代代表取締役 青山藤一就任
昭和48年（1973年）　株式会社 江洲石油を買収。初代代表取締役 青山藤一就任
　50,000リットルの灯油備蓄基地建設
　（現配送センター軽油貯蔵タンク）
　第一次オイルショック
昭和54年（1979年）　本社ビル（3階立て）を新築
昭和55年（1980年）　初代代表取締役 青山藤一死去（享年70歳）
　三代目代表取締役 青山金吾就任
　イラン・イラク戦争勃発
昭和56年（1981年）　豊郷町水道工事公認業者に認可
昭和60年（1985年）　豊郷給油所全面改装
平成2年（1990年）　バブル崩壊
平成3年（1991年）　湾岸戦争勃発
平成5年（1993年）　2SSで年間2,000キロリットルのガソリン販売量を突破する
平成8年（1996年）　下水道宅内工事の豊郷町公認業者に認可
平成9年（1997年）　下水道宅内工事の甲良町他、近隣市町村の公認業者に認可
平成10年（1998年）　通商産業省資源エネルギー庁長官賞受賞
平成11年（1999年）　資本金¥50,000,000に増資
　株式会社江洲石油 土地設備一式を買収
平成13年（2001年）　グリーン購入ネットワーク グリーン購入大賞 中小事業者部門 大賞 受賞
平成14年（2002年）　全国に先駆けて軽油代替燃料 バイオディーゼルを一般販売
　グリーン購入ネットワーク グリーン購入大賞 中小事業者部門 優秀賞 受賞
　日本河川協会 日本水大賞 奨励賞 受賞
　ユーロ通貨の流通開始

ガソリンスタンドでオペラコンサート

Pグロリア会総会にて青山金吾が会長就任

タンクローリー集合

社員親睦BBQ大会開催

旧豊郷給油所

平成15年（2003年）
　環境省中央環境審議会 委員就任 青山裕史
　グリーン購入ネットワーク グリーン購入大賞 中小事業者部門 優秀賞 受賞
　日本環境経営大賞 環境フロンティア部門 地域交流賞 受賞
　宇宙航空研究開発機構（JAXA）発足
平成16年（2004年）　日本フィランソロピー協会 企業フィランソロピー大賞
平成17年（2005年）　地域エコロジー賞 受賞
　リデュース・リユース・リサイクル推進協議会
平成18年（2006年）　リサイクル推進功労者賞 受賞
　滋賀県経済同友会 滋賀CSR経営大賞 準大賞 受賞
　社団法人日本青年会議所 第20回人間力大賞
平成19年（2007年）　経済産業大臣 受賞 専務 青山裕史
平成20年（2008年）　全国バイオディーゼル燃料利用推進協議会設立 副会長に就任 青山裕史
　ENEOSフロンティアより彦根インター給油所を運営交代
　バイオディーゼルアドベンチャー世界一周スタート
　リーマンショック
平成23年（2011年）　東日本大震災　タンクローリーで東北地方に支援
　滋賀県彦根市倫理法人会 入会
平成24年（2012年）　彦根インター給油所　地下タンクを全面入替工事
平成25年（2013年）　配送センターにA重油の貯蔵タンクを新設
　アベノミクス
平成27年（2015年）　滋賀県彦根市倫理法人会 会長就任 青山裕史
平成28年（2016年）　食品産業もったいない大賞 受賞
　旭日双光章授与 会長 青山金吾
平成29年（2017年）　東久邇宮文化褒賞受賞 専務 青山裕史
平成31年（2019年）　熊本震災　タンクローリーで熊本阿蘇地方に支援
令和元年（2019年）　滋賀県低炭素社会づくり賞 低炭素社会 事業者部門 受賞
　四代目代表取締役 青山裕史就任
　中華人民共和国（旧満州国ハイラル）に青山要三郎の慰霊 青山裕史
　豊郷給油所 地下タンク全面ライニング工事施工
令和3年（2021年）　ガソリンスタンドdeコンサート開催
令和6年（2024年）　能登半島地震 タンクローリーで志賀町・能登町・輪島市支援
　大洞弁財天（長寿院）の厄除祈祷大祭 殿様催行 社長 青山裕史
　中華人民共和国 広州 バイオディーゼル燃料プラント見学
　中国産バイオ燃料試験輸入
　菜の花議員連盟 総会で石破議員（現総理大臣）他議員に
　バイオディーゼルの取組紹介

バイオディーゼルアドベンチャー
世界一周したバスコファイブ

ベトナムからの視察団受け入れ

大洞弁財天長寿院 厄除け大祭の
殿様役を青山裕史が務める

長浜環境ビジネスメッセにてブース説明

配送センタータンク計量器をリニューアル

東久邇宮文化褒賞を授与

油藤商事株式会社は、おかげさまで創業一三〇年という節目を迎えることができました。

日本各地にある御神木や巨樹の中には樹齢三〇〇〇年を超えるものもあります。悠久の時を重ね、あらゆる時代を静かに見守り続けてきたその姿は、「継続すること」「繋いでいくこと」の尊さと、自然に対する謙虚さを私たちに教えてくれます。

彼らの時間軸に比べれば、一三〇年の歴史などまだまだ"ひよっこ"かもしれません。

それでも私たちは、巨樹たちのように堂々と、誠実に、この地域、そして地球の未来の為に、次の一〇〇年に向けて歩みを進めてまいります。

スローにしっかりと。

油藤商事株式会社 代表取締役　青山 裕史

油藤商事株式会社 130周年記念誌

二〇二五年（令和七年）九月発行

編集・発行　油藤商事株式会社
〒五二九―二七三　滋賀県犬上郡豊郷町高野瀬六四五
TEL　〇七四九―三五―二〇八一

取材・撮影　合同会社STUDIO LDK

制作・印刷　アインズ株式会社